尼崎市教育振興審議会 第5回審議会
議事録

日時	令和6年11月7日(木) 19:00~21:00
開催手法	対面
出席委員	堀田会長、石橋委員、川上委員、北地委員、芹澤委員、時水委員、庭山委員
欠席委員	なし

審議

議題1 教育振興基本計画(素案)について

会長:パブリックコメントについて、時期が年末年始と被っているが、期間は十分確保できているのか。

事務局:規定の20日以上は確保しているが、調整する。

委員:コラム記事は、計画の内容が難しいなど思った人がここを読んだら、ある程度分かるようになっていて良い。電球マークも非常にわかりやすくてよい。

会長:32 ページの保護者の負担軽減のところ、いつまでにどのようなことをするか、を市民に伝わるように記載できないか。

事務局:事業によっては市全体の予算等の関係もあることから、時期を書くことが難しいものもある。

会長:この先が未定なように見えるので、取組をさらに推進することが伝わるような記載があれば。

委員:10 ページが目次の中でどこかが分からない。11 ページ以降、グラフがたくさんあるが、グラフタイトルは下に書くことが多い。また、30 ページ、31 ページのコラム記事について、タイトルにカッコがあることが気になる。カッコがあることでかえって主旨が読み取りにくくなっている。また、32 ページの下から2行目、「幅広に」は「幅広く」が正しい記載か。

事務局:訂正する。

委員:これまでの議論を踏まえ、前向きな表現が多く、良い。各論5の33 ページから34 ページ、教員の資質向上について成果指標が少ないのでは。記載は前向きですごく良いので、たとえば、既存のアンケート等を活用して教員の養成が進められているか、を測ることができる指標を設定してはどうか。

事務局:引き続き意見を貰いながら考えたい。

会長:たとえば、やりがいを感じている教員の割合などはどうか。

会長:教育大綱の内容が基本計画の中に散りばめられているとの認識でよいか。

事務局:その解釈で差支えない。大綱と基本計画の相関を表す図を冒頭に入りたい。

会長:大綱は計画よりも不変的であると思うので、そのあたりの誤解がないようお願いしたい。

議題2 次期計画の評価方法について

委員：評価のやり方を変えるが、市民向けに説明するための評価なのか、事務局内に引き取ってもらってリアクションを貰うためなのか。どこで活用されるのかによって評価のまとめ方が変わってくる。

事務局：根本は教育施策のPDCAサイクルをマネジメントしていくもの。一方で、評価そのものは、法の中で議会への提出が義務付けられている。現在は決算議会のタイミングで提出している。そういった意味では、市民向けのメッセージでもある。市民に対して、施策の執行状況を説明できるといったものになれば。

委員：現行の教育委員会評価での改善点は、この計画の中に含まれているという認識か。たとえば、現行の教育委員会評価の川上教授の総評の中に、特別支援教育の研修の指標を設定すべきだとの指摘があるが、計画素案の中には入っていないのではないか。

事務局：毎年の評価を積み重ねて、可能な範囲で反映しているところである。

委員：計画に基づいて、施策が実行されているということを市民が肌で感じる事ができていくという認識で良いか。

事務局：そういったことを実感して頂くためにあるものが、この計画と考えている。学校現場への計画の浸透も重要と考えている。

会長：これまでの教育委員会評価が反映されているとの認識だが、次期計画の評価の中で、たとえば成果指標の平均値より下回っている学校に対して市教委から指摘できるのか。

事務局：評価のサイクルや仕組みの話で申し上げると、全ての指標で各学校の結果を追いかけられるものではない。計画は方向性を示すものだが、少なくとも方向性に基づいて学校や個人が取り組んでいるということが大切なことである。

委員：教育委員会についての評価とその答申を受けて各学校がどれくらい実施できているかどうかは、学校評価の役割になる。そういった意味では、教育委員会評価と学校評価がどれだけ連動できるか、は重要であるが、教育委員会評価と学校評価を一体に評価することは難しいと思う。各学校で自立して判断して動く部分もあるので、それがどれくらい適切かは学校評価の中で評価するということになる。

会長：審議会での指摘がどこまで学校に下りているかは重要ではないか。

委員：計画が期待感を募らせる内容であるがゆえ、達成状況が悪く逆に尼崎市に幻滅する形にならないようにして頂きたい。地域性があるので、横並びにできないものもあると思うが、子どもたちは平等に学ぶ権利があるため、地域差がない分野は横並びで進めていくべきである。

委員：視覚的には、横並びはすごく見栄えが良い。が、それをしていくと無理矢理タブレットを使わせたり、協働的な活動のために不要なペアワークを導入したり、本質が見失われてしまうケースが非常に多い。指標の達成は手段であって、目的ではない。ただ、個別事情が

やらない理由として持ち出されるケースが多いのも事実だが、杓子定規に横並びを意識しすぎると形式的になりすぎる。たとえば、学校の内情に応じて目指す到達点はそれぞれの学校でしっかり議論されるべきであり、指標だけが先行することは危険である。評価をコミュニケーションツールとして、その数値の背景にどういった事情があって、どういう対処をするかということ議論することが重要。

委員：たとえばタブレットを使っていなくても学力が上がっていれば、保護者も文句を言わないと思うが、タブレットを使っていない、かつ学力も上がっていないとなると他の学校が良いということになる。

委員：順序が重要である。学力は様々な取組の積み重ねの成果である。たとえば授業に集中できるか、学校が安心して過ごせるか、といった様々なことの成果が学力である。各学校が自らを分析して、学力だけではなくて、様々な面を捉えて、こういう課題がある、こういう成果があるといった議論をするべき。

委員：一般論として、トップダウン的にこの指標が低いから対応をせよ、となることは、その数値を上げるためだけの取組が先行し、危険。成果指標は実態がどうなっているか、のバロメーター。たとえばある学校の達成状況が低ければ、その支援をすることが教育委員会の役割。たとえばタブレットの活用率が低ければ、使い方が浸透していないのか、良い活用方法が分からないのか、原因があるはず。その学校が前に比べてどう改善されたか、が重要である。そういった姿勢が自治体には必要である。そのサイクルが最終的には保護者にも良い結果になるのでは。

会長：たとえば、タブレットは導入から5年経過している。5年経過した段階で活用ができていなければ、それは実情に応じてではなく、一定時間が経過すれば、市として、取組を強く推進していかなければならない。

事務局：よく教育委員会が各学校に対してリーダーシップをとって統一的な対応をとることを求められることが多いが、学校によって状況は様々である。たとえばコロナ禍の際は学校によってオンライン授業を実施した学校もあるが、それを全ての学校で行うのは難しい環境にあったのも事実である。それを各学校の状況を見ずに強引に統一すると歪みがでてきてしまう恐れがあり、状況を見ながら対応をすることが重要であると考えている。学校評価の話もあったが、それに加えて現在、コミュニティスクールをすべての市立学校に導入するよう取り組んでおり、年度当初には各校長から学校教育目標について学校運営協議会において承認を貰うこととしている。その年度の中で、その進捗状況等を各学校で議論してもらっており、教育委員会としては、そういったことも踏まえて全体の評価をしてもらいたいと考えている。

委員：高校受験や大学受験のことを見据えると、尼崎市以外の地域との差が著しいと非常に不安になる。新しいことをやっつてすぐに上手いかないということも分かるが、その改善にも一定の時間を要する。その間に、子どもは卒業をしてしまい、実験台にされた、との思いで卒業する保護者も多い。子どもにとっての1年は二度と取り戻すことのできない重要で

かけがえのない 1 年である。そういったことを踏まえて前向きにスピード感をもって取組を進めてほしい。

委員：学校の現場へ基本計画がどれだけ下りているのか、という視点で各論の振り返りの中で、学校とのコミュニケーションの振り返りも伺うことができるのか。たとえば達成状況の低い学校にはどのような背景があるのか、を聞くことができるのか。

事務局：個々の学校の背景を評価に添付することは現状考えていないが、評価をもって各主体が自らを考えるために活用する評価としたい。

以 上